

34 シルヴィウスによるヴェサリウス批判についての検討

澤井 直

順天堂大学医学部解剖学・生体構造科学講座

パリ大学で活躍した医学者シルヴィウス（ジャック・デュボワ Jacques Dubois, 1478–1555）は当時を代表する解剖者であり、ヴェサリウス（Andreas Vesalius, 1514–1564）やパレ（Ambroise Paré, 1510–1590）を教えたことで知られているが、それ以上にヴェサリウスへの反論者として解剖学史に名を残している。

シルヴィウスはヒポクラテス、ガレノスの医学書に精通し、両者の著作のラテン語訳の出版や注釈書の作成に携わっていた。解剖学に関してはガレノスの解剖学の知見を整理し、新たな解剖学用語を創作して後世に影響を与えている。

このようなシルヴィウスが行ったヴェサリウス批判は、旧来の権威に盲従する解剖学者による観察知見を重視する新たな解剖学者への批判として受け取られてきた。そして、ヴェサリウスの革新性を浮き彫りにするという効果を生んできた。

シルヴィウスによるヴェサリウス批判は『気狂いによるヒポクラテスとガレノスの解剖学への誹謗に対する擁護』（*Vaesani cuiusdam calumniarum in Hippocratis Galenique rem anatomicam depulsio*, 1551）という激しいタイトルの著書で展開される。

この中で誹謗者の名前は明示されない。「気狂い」（*Vaesani*）と「*Vesalius*」との音が似ていることからヴェサリウスを暗示しているという指摘もある。本文の末尾では誹謗者は「陛下の故国で生まれ育った、無知と忘恩と横柄と有害な不信心の典型であるこの怪物」と表現されている。ここでの陛下とは現在のベルギーのヘント生まれのカール5世のことであり、同じく現在のベルギーのブリュッセル出身のヴェサリウスが誹謗者として想定されていることが読み取れる。

『誹謗に対する擁護』には、どのような誹謗に対して、どのように擁護を試みたのであろうか。

シルヴィウスは28の誹謗を取り上げるが、その内訳は、骨について11、筋肉について2、軟骨・靭帯・肉質の部分について3、血管について4、神経について1、内臓について6、その他1となっている。

骨についての項目が多いのは、これがガレノスを擁護する上で最も重要であったからだと考えられる。ガレノスは専らサルを解剖し、サルの記述を行っていた。神経や血管、筋肉の記述においてヒトの形状に最も類似したサルを選んだことを認めている。一方で骨については実際にヒトの骨を見たという記述を残している。

ヴェサリウスは、ガレノスのこの人体観察の証言を否定し、ガレノスの記述にはヒト以外の動物の構造が織り交ぜてあると指摘し、逐一報告した。この指摘が、ガレノスは骨については人体観察を行ったと信じているシルヴィウスにとっては、ガレノス解剖学の根幹に関わる誹謗であると捉えられ、詳細な擁護を試みさせたのである。

シルヴィウスはこのヴェサリウスの誹謗に対して、ガレノスの記述の解釈の誤りを指摘し、あるいはヴェサリウスの観察が誤っていることを指摘することで擁護を行うが、それでもうまく擁護しきれない場合には人体の変質に訴える。つまり、ガレノス以後、ヒトの構造自体が変化したために、ガレノスの記述と現在の人体観察との間の相違があるのであり、ガレノス自体は誤っていないと指摘したのである。

これらの擁護は、ただガレノスの記述の正当性・正確性を訴えているのではない。いずれも、ヴェサリウスの記述を実際の人体観察と照らし合わせた上で行われている。